

抱っこして歩くと 赤ちゃんがリラックスする 仕組みを科学的に証明

2013年4月19日プレスリリース

理研脳科学総合研究センター（BSI）黒田研究ユニットの黒田公美ユニットリーダーらは、哺乳類の子どもが親に運ばれる際にリラックスする仕組みの一端を、ヒトとマウスで科学的に証明した。BSI精神疾患動態研究チーム、トレント大学などとの共同研究による成果。

母親が抱っこして歩くと赤ちゃんがリラックスする反応は、ライオンやリスなど、ヒト以外の哺乳類にも見られる。母親が子どもを口にくわえて運ぶと、子どもは丸くなって運ばれやすい姿勢を取り、これを「輸送反応」と呼ぶ。しかし、その意義や反応を示すときの神経メカニズムは分かっていなかった。

研究グループは、生後6ヶ月以内の赤ちゃんを抱いた母親12人に、約30秒ごとに「座る・立って歩く」という動作を繰

り返してもらい、赤ちゃんが泣く時間などを調べた。その結果、母親が歩いているときは、座っているときに比べて①泣く時間が約10分の1に②手足を動かすなど自発的な動きが約5分の1に③心拍数が歩き始めて約3秒程度で、顕著に低下した。

次に、母マウスが子どもを運ぶ動作をまねて、離乳前のマウスの首の後ろをつまみ上げたところ、ヒトと同様に鳴きやみ、自発的な動きと心拍数が低下。また、運ばれやすい姿勢を取るには運動や姿勢の制御をつかさどる「小脳皮質」が必要なこと、おとなしくなる反応には首の後ろの皮膚の「触覚」と、空中を運ばれているという「固有感覚」の両方が重要なことも分かった。

「哺乳類の赤ちゃんは“輸送反応”によって親の子育てに協力しているといえます。このような研究は今後、科学的に裏付けられた子育て方法の新しい指針づくりにも役立つと期待できます」と黒田ユニットリーダー。

●『Current Biology』（5月6日号）掲載